湖海抄竹集

上

中村俊定

中村俊定文庫
文庫 18
67

詠諧独吟集

上

詠諧獨吟集目錄

上卷

守武
貞徳
立圃
令徳
正章
重頼
梅盛
定清
李吟
安静

下卷

林門跡
徳元
幸和
一齋
卜養
玄札
昌房
山石
如貞
ステ

陵宣藏

廿五丁より廿八丁まで別に原本あり

這俳諧吟味ハ虫乃よわ
にほ手ふ事侍る哉狂句は
し侍れハあるなしハたとさ
さつひとへてうるもまのとまて
よろ筆遣くなくして
かゆらねのあそひもそ浪へ
入まりふ事に侍る人あ
兆とみる人も撰るさる人

追加
西武

中村幸定文庫

内宮長官荒木田
守武

松風にはなかなか子日かれ
風ハひくとも梅の法ふて給
春寒さと山朝とす梟なひて
かすとやもとも袖乃ろ常
手おる錦きれ人のあい雪よ
作なひなりいつあらん
そともれハ庭前乃まの宮武お
月よはつふや寿水かたま
八句目の月

上五はウ
下葉ちる柳に風か吹さそ
なかむるをハいはて胡弓乃空
かいさくハるかつりて錦むしふ
世ふ

星野文庫

のもいろ

ちくめのくにかたりけれ
ばかりなる度ふみ紙ばかりなる人のもとに
さのみに日おくれてまゐらせ
一筆やまゐらせ添へて送るべん
なほなほなるべきあるべし
口ばかりむつかしけれども逆ひきく
奥州なれども物といはれも
なるべくの制度乃外に
志ばかりかんおぼえんあるべん
花さんつて脇門ふあちらく
なる屋敷乃ほ智乃
ゆかりのあるべきをすべき
よ

なのもれが野まやこゝろあるべん
業平を乃方ましく
人のむもとめあふ秋乃夕暮
名残乃八きくこゝろやまやべん
月をわくれば秋の仏ロ
かるばかりあるべん朝乃け
人をあつるはめるかるまや
留をもしいるおもあれば
案内やを門をあるべき
あれば者ども踊りて
そなたさまとけりとれるさへつり
わらはなきんの程や古歌

おとて書てりハ大地とむけ
二ウ
人ハこて墓文書乃なまぬふ
法ぬとちとやこと記ねとくん
むとをりを撥ま梅ぬけを今
彩ま乃屋ま立るかんをうみ
す紀ぬる遠山ぬとをりぬふ
ま紀ぬを矢ま撥やあんん
猿ま文ぬ夢乃知ぬや
ま文ぬこ八かきりまて
松ぬて秦乃拾望ぬ狩て
かん陽ぬ秋風ぬく
月やおを八和ま紀ぬを

ぬけ紀ぬ八ハ宮ぬれ
花ぬを面ぬを八ハくるあ面
牛ぬとの春乃ぬれうる
三ウ
ぬ乃ぬ原ぬ狩ぬちをかすぬん
ぬを八ぬを物ぬとりや
ぬを紀ぬ乃ぬ焼菓ぬ行ぬて
波ぬ月のまふ松ぬを八面
ぬを箱ぬをいぬちやあぬん
ぬて義ぬ面ぬを乃紋ぬ
ぬ楽ぬ一村面ぬさりぬく
ま歌ま紀ぬを八ぬ山ぬとまれ
ぬ風ぬん又行やん草ぬ尾

世にたぐひなき紀のうちぜなりの
初もうひきあふこん日いくせん
幾世まつ乃ゑやしをそ
山伏の人をなつかしく知れるく
ゐ乃ゑかい御あるれ
おとこ入風景乃有せいこん
板橋ようらもあるを考
嵯峨より寺第八より袖ぬぎく
月見の会北野ゆくそく
大方北野やちるもの
みこれ其ゆくらはくれ新
茶乃橋の一てう二てう取おく

子をそ紙つゝ山角乃道
ゐをてをかゝれかゝめ茶ぬ
みををゆきあるものの
花はさく今八廣寺行せん
さてゝうたに角移もれそよ
去乃夜のゝ仮屋稚
月の橋とゝやかをゝるこん
小車ゝ此屋ゝれる杜乃風
ゝうゝめゝそ庶牛の角
大りゝ去日北野ゆくれ
なゝ北ゝやゝ高ゝゆゝこん
白ゝ乃月世大ゝ月の又ま

ちひ[illegible]紀人ゆまはせにゆり
物おそ[illegible]宿ちうあれ持佛堂
尼そ[illegible]なやはらふかむさ
山水よう[illegible]ひあ[illegible]ハ坊主すて
いふ[illegible]紀だけ[illegible]屋そ[illegible]ひ
ちゆ[illegible]ものやちを[illegible]ん
夢り源氏乃みゆる[illegible]松
等盗紀ハ[illegible]ハ為月之く
七年十六月まや[illegible]ん
乙女子[illegible]ハ[illegible]ハ社の蓋
盗人なり[illegible]ゆ[illegible]
物[illegible]ハ[illegible]紀乃れぬん

あ[illegible]ハ[illegible]乃[illegible]やはらた
か[illegible]物も毒紀のそ[illegible]ハ[illegible]
金乃[illegible]ハ為[illegible]ねよ
とゞ[illegible]ハ紀人[illegible]乃脚力
[illegible]幸[illegible]ハ[illegible]ひ[illegible]あ

享禄三年正月九日

宇武ケ白天文九年[illegible]と誉る
[illegible]て此巻[illegible]十年目の後世

松永氏 逍遊軒 貞徳

なふりのかしらのそせり（頭殿）
あそびにはかくるぬきのはな（葉）
さつおをえ持ひくわれん（茶壺）
めくれたにかの水場備
正札方紙おれ しばらく葉紙
こししとも以ハそて氏はれを
神堂なん名付頭ひある
陶のかり[illegible]規にやと
おもひまるの恥かしさとに
とふ川はら神んとかきは
むらのかよ弥 邦とやいく

くるやせり稲りひとり川を
いとこすまてもそてにそとに
をとへ（とも）一句まかし されとも
けり殆んとへきよりあわ筆
を深侍れ

子規ハ鶯の巣に結ても巣也（郵金）鶯の巣は鶯の古巣を借て卵を生す（三才図会）
かふ吾の俗名・学と子規に用ひらしあり

鶯のかひこの中の[illegible]風さ志把の袖濡れ　子規（掛）
うんこよりをみゆる夜山
蛾をと雨れつせもかくくもよのけく
杉をみやうまり秋雨もかりある

前句の雨を思念中に入れて情天を付たる連歌の作ぶりにて貞徳の語戯（ママ）

十五夜乃月まはさいる雲も凪

上七はかり（ア）をかけん音韻の語戯

きり川かり把かりわかりかりを

七

志ちやかに伎のいさ舟を枕なれや

三丁 安芸 とも 四十三丁 季吟の句に前くさりしも花の色…や 此発句は秋四ッ目 みれは季を持ぬも 又は季の雑にもとる

菊子代九堂ひろく陸く

さふら留まり力や一もん 菊一文字

山乃ちらより上流の衣

打流まて迷ひはさるや粟田口

駒のありとも見られ加茂河 加茂競馬

いつとなく端午せ月になりぬれは

打まとして見るひとへ衣

ちりぬ花乃人形や皆紙なるむ

風流の神を紀つをうちら

おほれたる月に白花ちて扬く 常

身にしむはうるはしつけり

婦く乃句に作り加り草りさす宿

山本取とりわや〳〵し禅僧

か〳〵さに花紙折流打つけ

光く見へあらしやおまつふ武者

二ノ

とらふや加すめく匂し札乃主

雑色いそく一てう北は

何くへか院乃御業のえぬん

平流の乱を雪をゆらしき

酒そくに侍らん東にありいや

世紀乃もろや世婦人さかる

志ハ山花を宮紀ゆくへや蔵ん

むすめ子祝よしるひかね

まんぐわつ月小の日なれば
人皆祝ひ喜ぶ事なれば
年毎の井かぐらを打ち
吉田の神社や神社行れる
出雲の国の社を
二ツ木八幡宮まつり
旬
ウ
しめ縄の紀竹や春こと
神社に行ぜう国なり
かぐらいとなりぬ
ぬはぬものハ
のうち紙を縄もつ
ちかる里人

鎧やうちの国
いふを聞て
○九の字何ぞ前の誤か
一旬立ちぬ
前句を
聞て
殿を
殺し
宰を
話
何ぞ
水を
花の
かもの
三ウ
ありう
多ぬ
あつ

中
巾
胸
背
巾
縄
巾
正月
節句
仏

前句の説明

了ハ地乃多くる御のくるし袋

本倉れちもむあん志川の秋

おりかな理しもあれるかや山

うれあらきの月をひらく

別れふ乃んれハこさん男かく

免ちせん志う小編やむきへる

鳥乃子紙十つてなるの千話て之

ううるを記く や唐士の古事

うれ小書東坡か作のうへの僎

ほしかむめ紙をよこれゐらく

ウ

閑の秋ねる営射殺して

なかぬかしまいまけしもる山

（朱）宇此山が 本倉寄其ハ之織田抄の浸界を防ぐ為め用旋ありて云ふ事と 伊なり天正年間

（朱）高野山 暁の歌 少なからず 新中 太平記 光厳院 19年 [illegible]

（朱）『高野山 迷ひの雲ぬさむるや其暁を未だぬ かなぞるの作』

（朱）金柑頭へ（禿げ）中国九州迄で

（朱）前句 ひかりつくの...と暁月を云ひ ひかりつくの躰 禿頭を添へるは [illegible]

（朱）對付の如くして [illegible]

（朱）つあうゆちけは

盗人やきうも紙客腹のつくん

きけ乃て倫ちるをもるおなき

中りれいたきの奥へ川錦う

皃もう滄律やひらうなすらん

数かとくるまあきの紙ちうかく

むる乃屋かなる野道の月影

乃めんあまりて京かとおもふ秋の雲

衣頭うつやわらきんをも

兵坊主乃ねくねむときぬひ

扇日なるハ出るくありてれ

仏おれ花りをやつて手向けれ

かそしも清盛の地らいせもほよ

各ヲ

とうてんゆうそはなきん水き
はくをあらぬ氏まれひ業屋
近年をそのくはんなる
あつ紀もかるやをたりはと
ひ義様後おまく北れく
ものうとをもんくぐん
ぬるもれ神のなる弦月
後物をきた何をきのひち
工前乃中小面きるひけ男
あるひくまるうををるひ
月多くるれらをり泥の
いるくく摘や鹿のあるし

いや紀ろ屋ひるうハ雲物題
ようを雲ていふ世乃中北よき
牡くもん年小みゆる筆ヒ
よ紙ひ竹小四氏顔をち
大ろ乃とうあくくる源氏物
屋ハ江川をうるをくいく
哲乃我ひさくしあるせいき小
現理乃様ゆや事様かくん
をる赤さづ面ろれぶびよ坊
考る和ひまねもあーや
かの四屋和かあきなる氏
詠三首 紅葉

うつりたるとおもふまや
もさつかもくやかつらん
宮人ふあはぬ秋の夕しも馳さもる
ていしの入もくるはるをかるあき
葉葉毎秋をうつすかの
かりぬとなれ夕ぬ夕ぬ夕ぬ
寛永廿年卯月三日

獨吟百韻

杉翁　立圃

西ゝ年を老れ郎乃枝葉哉
道をはなれ紀歌の相傳
玉駒乃曲素ふまるあるく
年れ行ゝ西ゝ武士の子
捉を毎を初れ初ゝ
山ゝとそり狩やめ
百姓を四郎刈ゝ月の秋
めゝゝや素紙ゝ牛山尾
四ウ車屋ゝ
大扶殿とそいつもやゝ

なんをもふ似せくまるみの中
よをめ河志乃流きひやうき
志乃武乃稜河稜ふとうもちて
玉嘉乃ゝ乃川原夏菊
初ま紀風炉もやかたり
いゝ紀ほとうつ乃つき
まゝもる神れ乃法米
伝ゝ乃ゝ乃かなふ立願
ゝあ河おをひ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝゝ紀旅乃まれ仕合
月の秋ゝ地れ流ゆるきれく
ゝゝれほきにりなりゝ

身はゝ乃ゝ乃なひ別ねあれ風
戸河をほるとゆるゝ元
寝ふふ乃ゝ乃ゝ和ぬそゝ礼
ほ乃ほれくはるふゝ性
武堂乃達ゝ乃ゝるの先
狩場のゝゝり遊ふゝ
ゝゝゝ我ゝ乃ゝ乃ゝ武書
日数ゝ我ゝる頼ゝ師走

○
ゝゝ河ゝの流ふ遠ゝぬゝゝ紀
あゝゝなゝゝし葬礼の時
かゝ紀世をゝゆいもあひ切
ふふ流ゆゝりおくりゝむ

月ふかいこ風雲何ぞなく
星は西ゝゆく　越ぜん國
敦賀(ウ)の港に船はべりて敦賀港津
天龍寺船の風に依
て神ふ形勢の驗りあれて
角川とかりくらの法力なりと
山伏は金剛杖をつきまつ
そりうたをなる紀州守番
鶏のなくまねをなき和
うくるへとくかくる節ふ
はれなる初めの夢は冷しと
夢を見さうしみ箱の内

ゆひを切ぎるや神ふ形ん
月日をうしやを梅む科人
むれを梅剛とかくる松
擂門乃印を小ふ梅ふ香
天神(ニヲ)の文五殿む朝朗
塩やけこむ和琴北浦流
丸とうしを芦四兵田殿を麦殿
奢乃ちうあ形あまあ
奥山の風は雲紅吹まう
面ふう後北月ふむあく
神鳴乃よ和ふ歌も冷や
死人の罪を祈き若

川岸より流る舟橋をとりて
関ヶ原へとおくるやせ馬
立わかれいさらば残る市場
上下京ふるさとへかへらんへ
しら波を紙屋も利用するなく
そやるハかなき風乃つひ
生（ウ）駒ヨリ打こむ京の者ども
浦乃軍ヶ多き鉄炮
ゑ南を京ハ一揆ヶ持籠
油断なく守り居まりめ
此佛城唱まへやまとさん
いまゝ世やふ乃新蔡

かけ乃ゐるとうへを渡も例り
枕ヶ山ヶ山ヶ流れ雨乃ふる面
流れ鞍ハ簡単ハ京ハ西
川道遠ハ月のかゝさ
夜遠ハ水ヶあひよめて
人ヶ行ヶ川ヶ里へ乃ゐ如
敵地も気あるやそか智の紙
長ヶ家ヶ人ヶ形の油
義（参）を抜ヶ奇ヶ八細ヶ業ヶ抽
又ヶふけヶ紀ヶ水ヶ
ゑヶふ乃ヶ雀の切陶ふひり
ゑけヶゑヶひゑヶ京の中

長く八幡宮に奉仕し、[illegible]地
かさねく高く紀城の石墻
猪ども時の太鼓の音に驚く
みれば仮玉小菊の僧達
なほ名残の長刀なすを誠ぞ
又よく非情草木の情
知る鞭の水きはもとれば
陽炎の下に紅ハ[illegible]をいき
酬なる用捨の筆法
ハ[illegible]り小菊りこんの酒
一門の中小僧八角ひら
め出されく侍ふ縁色

氏なほ[illegible]も景[illegible]
唐き世ふ[illegible]
[illegible]
[illegible]百[illegible]
大[illegible]
領ふ多く[illegible]人

雛屋立圃獨吟

獨吟百韻　雞冠井　令德

袖をいろ縫の折葉は落つる
秋の月色は去けり紀呉服屋
二つ子白菊きる程きく
ひとりかやくく灯蛍の後
同来る月は父母の数寄は変
秋の雨高雄うるの紅
冷々と一甲は親頭
数寄はぬ小ふ袋は袖
ぬるめきく秋の月の男

節分は鬼を無みのさんもん
はやらぬ行ふ天満は
夢を抱ふ山ゆく
歳の暮の橋乃あ
月うけなる月の酔
あるくと用よも起く夢別
家の智恵は小かくて大風さ
体ふ八福あ恵は家ふく
勅るまいりは先はひあり
か茂川は一原也も水入く
あるれ小ふんと世の小り
歳の面ふあるを意は暮れ

うけ遠てるかとも我妻
いつ牛もちにいは唯ひとり
ふきう人はとよりはやはせ
引張ひきれ拔乃ゑた添木
風以前を鞭をうつれ
みを越小ちゑを越えた
母ゑ車ゑひろいれた
ゑ拔れさやれ下月ゑ
伏ゑ人風呂ゑ入ゑ記録
会ゑ所の後のえわまゑ
拔ゑく軍ちつけゑ
蛙ゑ家やかゑ乾まり

流れまるゑ我ゑ
叫ゑ小指せん力質ゑ
忘れゑまゑせゑ風
史人いれある神主の袖ゑ
ひやく河ゑのゑ
おゑ死地ゑ
海ま近くゑよまゑ
ある紀時いて硯の墨ゑ衣
和大ゑ人ゑ
かけまゑ日ゑ墨ゑ
蔵ゑや人ゑ
拔ゑけれ狩ゑ

いつ傷小主れかゝる紀伊わ紀
山陰や月小知いひ多ゝし
たゝ面他の桶枝ゝる さ紀
花かさる後も れ知く
ア人きく書ふんゝ知く
三ウ 蛍紙かこつけ 二乃ふ
和んの ふ紙明ゝすれ
かきゝ知く 蛍や芋く 蛍ん
蛍後乃地刻 時地ゝる
うつ一かゝる 平北 京附ゝ紀く
出ふ葉なゝ ゝめ十や字 盛
てこゝねゝる 豊井新 福の面用 表

ほちゝれ物北 ふ山ゝる
姫川ちゝと 山ゝの 人大ゝや後ん
見北いゝゝ ふ蛍乃 ゝ山
白川や 逗留する 月の ゝる
大風 ゝて 転ける
ちゝせて ふ花紙 祝さま ふ 生
乃ゝ見 ゝやん ゝん
ウ 春乃日 ふ勝な ふ
新の刻 ゝ
家 ふ ゝ
耳北 ゝ乃 ゝ
いや一紀 ふ ふ 秋果く

風まくさをまぬかれぬものは此
世のみと念仏やすん
なんりうの人のかもり熊谷
ちやくせをゆかりの櫻
素人々りの孤生る山
さんくとひらいかり星雛
面白いやうの除草の家
鶴の真綿先かりけふ
神ゝ二寺紙をさ帝杉まり
多子年をまれ夫婦そ
杉人まり堤の枝ふ
鶴ゝて和ふ床ふ多

佛人穴紙をかけ茶碗のむ
信仰ふそらぬ紙五月紙そ
煙霞ゝ国をきつき秋風
虫ゝ毎たんざよりふよりう
菜まくて和んうれ
焼出す四紙や綜多形ん
面ゝ紙あゝ今ゝうゝ油
地獄ゝうゝ人のなゝと
祝物語くなく宝北宿
麹紙を仏るあひくあゝん
ゝ三月やゝ毎と汲ゝ年
ゝ紙ゝを思ゝ橋や海ゝん

〽尾ゝめく松ハ咲ても散ぬ花
言の祖ハ多くの此道の指なり
〽かりは記録ぞ入て誠よき
〽鶯ハいと急かしく声つまる
〽春おき出ひの指先や笛
〽夏なひく俳諧下向の花の袖
写出る事とあるゝ年
合点五十八句内長三　貞徳

独吟百韻　安原氏　京ひなや作太夫独吟

正章

〽瓢草ハ志ハ紫施の売薬哉
蕣をもあさも露はかなき庭　蕣何とても花みられぬ詩にも蕣花みゆる
〽あれ物縁ぞ続かり分月夜
〽秋乃野分の花ハおかし謠
〽荒駒をいそぎ別れて轡虫　馬　別　くつわ　里ハこ長くいなし
〽餓りもいと吹く小風
〽あらくて帆縄さそふる船子也
〽生捕ぞてる海賊とて何
多くの志がハ知る事の挺也
家乃うちやまて安らいつく鳴

鞠場をくるくるやなぎ立なが
ぬれたる花ちりしをる所引ふ
思ふ秋を深世乃後俄の法編る
月ふかく目はよふ大井川
さひ鮎のけを絶絶網をい
引ぬ心乃飛ハ人せ川きやう
風華はさきかゝ紀五戒さく
反サ和乃はたこんおん行ん
風ゝ秋の面をたゝんん
久乃面はう我きをきゝなや
うゝめ八橋よ紀花と嘗て
紅粉乃小袖のすゝ紅き月

ニシ
裏さ人立ひゝ五年は嘉
新屋乃菊の陽ふ屏風かゝ
菊ふは作れを作む吉乃
ゝ山なれぬ四人乃消息
紙関ふの作ふ席ふあふ原や
對ゝれ辺ふ志ゝ和あゝ
給行の志ゝ志ゝもせぬ志ん
おゝひやゝ新世貴妃乃紀
杉のゝ藏の嘉礼玉のゝ
生夫婦ゝ和秋ふ礼
寺ゝも奥一入志世ゝ
八紘すゝ月の和念仏

乳　手な乃梅のかけに宿かりて
乳　月もなき夜やよめん定家
鶯は来て鳴はる耳にきく
乳　二千余年菱もちらんも蔵
乳　客道ハ軍おちれとわすれく
おし花乃雨ても光りかゝやく
乳　月影にわたりれ錦小龍田姫
乳　みすもともらもされぬ秋風
乳　寂しさの空に紀大内門乃おく
乳　花せんぐやま賀の里人
乳　ゆ風袖ハ色梅乃うす衣
乳　折もくれつゝ涼む橋まくひ

乳　川さそへ酒の酔ゐくちまよく
乳　うつもろ月に声きゝけり
乳　余念なく草に柳よ飛胡蝶
ちりては風もあけいと梅
三　乳　寂せて秋乃月やなれむ近来敷
乳　ましんのも哥にさくら顔
乳　小庭乃一首に物哉案しかす
別のくちハ何をいふさん
乳　寂しさもかゝりかく紀病かく
乳　ふるみ苗にむすびつきぬ
乳　五月雨の降やむ海にさゝへつ
神寺の時に何とさまきぬ

山寺僧乃ゆるりと朝ぬて
見れなきれれ子幸をれ
れ校小屋るむ童成徒い付
れ糸さる紗のうらんかもく
ぬきとなる海ま玄やえぬん
あやれ小河りあちふて袖
関されあん乃ちまの拾果く
傳ちくれれもれれ桶
芸乃ちふまそんやなちん
毎年ちく八日りけ山ケ
巻ちやえもちくふ
ちれされち乃ちりちひ

形ちくれ乃ちかさひもく
なく八何ちをちまを茶れれ
猿澤乃生るうひなれ弐分ざま
子神ちひしてうれ八百万
拾数へ紙のまふれちり
ちけ和ちくく大ちのケ
節小波海ちやちも碑めん
おり弥月ケ月ちちろく
玄れ和乃蓑ちれ子和
耳自影敵小おりれまの夫人
ふちりちれくき玄ふい待
ほちく月お和紀蓑や事申

『是は左手ちの和に百万と申者ニ小西誠曲百万』
地掛

十月小春紅葉を尋ねて大原に行く
初会詠いとすぐ出でぬ神
八重垣塩竈中風まつ吹破
ぬ宿の情思ひ出し
旅とも知らぬ人に付なや
舟乃屋いとふたるる舟
恋慕ひくる船は水乃あり仏
おもひ出せばなつかしや
佛事祈るや彦乃ゆ
徒讀いんの月をかたり
机の上乃哀ひを世に
流小入くおとり兄里橋
菜くよなる大至みるふる一年

定小十五 八月 公四

乃神や彼ふれ胃乃社
毎くなる姫を祈の心中
舞入の仇は生んを例て
形ちをもくまく狂ふ
花乃社参詣お詣まれ王生来
ふるてむ切河乃水
仇ふれ
人点七年六月廿又

貞徳在判

扶桑
きみ事清流乃瓢箪
口の世を紀をこうわけおくの
てい生く

明心居士 貞徳画

ひやくまんの孤階のあつたやう
こはれ作かくの如くそこなく

寛應三年三月十七日　定清

ちとせ弥生末中七日に貴ハむ臣紀毎氏
十七四ニ月おあらたの名れ今日を
う孝中長ふと男子ハ歳ろう
まとと以ととりとよりと弥ろなる

身ハあすへきはなとつみをさき
托す人民為海ふのミかき入れぬ
松の山家とおんよ住なるなかし
の娘乃やうふちらぬき併をぬき
慈所ミめつハ心の水乃あさきら
ふ了我かつ了へき道ふ行つよ
いやおをひ乃へむてを救せんうも遁
子ハ釈ふするなる和と申せのうに
慈し托附ハかうあんりと我とアる
かうあさるとよ御うふあまろうある
句ひとうにをれをの依う百乃句とぶ
して佛あふそ所へ入りしをの入給る
子我

〽秋彩や七志れ形りん春乃あ
〽花ミくまつる石塔のあ
営ると續備乃徳の教ふ御く
定かとひらけハ朝日きらく
〽晴なるら茶れ湯乃家をも中陵
野なけふ法のひらむる奔ま向
〽月乃秋ハ穐とハ穐まへ出く
雪ふハうく厳乃上流
〽朝敵ハ露をもうさん貴紫し
斉ふ厘りく晃のうぬく法
〽花乃名も乃百合とハへハさやや れさ
とこなりつ紀内裏上﨟

蕨ゆすらうめ
あおうめ
とうへいたけ
彼岸のもけもも
うめ桃
仕そけ紀州和の先
嫁入の桃
月をそつ
杉ゆ
子供
二頭
きくを
古塚の桃や人形をうまん
昼をさひ紀三味のうち
降れてゆ
一流代
初摺
絵本書四季草本
霞種を類ひ
外ひ
月ゆ
めん
旅
磯石
毋の中

塩風おだうて脇やいもん
鑓くれやもてくるそ弾きれりて
一命をおもまて玉かへ者し
先ゑれ野を行ふ鉄砲
狩人何ろる表紙のろ人
栄おひ法まくろる者ム
慶年八月中旬月在ふ歩ろま
車に揺ろうそね景者り
考ケおくそけいのはたろ見
数百人金ゑ屋そまえ屋む
月番紀兵衛を走ほきれや
おろもおふ病人乃伽

意思ふ人乃むれ移とひて
二世ゑケ月ゑ者り老宗さ
主従乃道かきまれ戦ひふ
ふろのわを知ゆくれまる
旅人の十方ふれ宿ろれ
追剥おあふ者ろ知き
そろまけ者ゑ知ゆ
侍やゑれ傾城ろひ
切おゆるひふちれいやまむ
不切乃行の志ゑき包丁
内ゑる置乃表ろおりて
せそ紀田金れ住ゑ信き

月をふなれぬ人は世をきき果
子乃なれ婦や秋ちゝん
ゑゝとかゝちなれ紙れまし
俳句（ほくいうきよ）
ひゝまに新つゝ紙はわて
川原の院すゝる塩竈
養性乃ゐ風をとゝて
志ゝ山おゝゐゝ遊君
盃入福よ一度真ゝゐゝく
ゝくになる傍家の中
幾ゝ古する一れ人ゝゐゝひ
ゝりきをなるゝ俳句食

冷ゝ代ゝゝ
行乃ゝなゝゝ秋乃大風
面影ゝ行ゝ
月ゝ
花ゝ紙源氏真ゝ麗
つゝ山孫ゝ行ゝ
久
ゝ雪ゝ踏ゝ
ゝ家ゝ紙乃場
東風ゝ川ゝ浪ゝ垢離ゝ
ゝ初瀬乃朝ゝ
ゝゝ別ゝ俺
風ゝ行ゝ

[illegible]留[illegible]
[illegible]
いとけなき[illegible]
なくなく[illegible]
[illegible]
塙[illegible]
蛤[illegible]
[illegible]
石蕗[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]せよ[illegible]紅葉を一さかり
なさけ[illegible]
やるみ[illegible]
[illegible]

付句六十六句
巴長五　宗著　立圃

聖廟奉納　有詞書

李吟

清[illegible]神[illegible]
凍らで
[illegible]

[illegible]

このあたりかる庭乃いけ垣
月のりてすゝめ狩の筏ふた
湖風ら白帆らん乘せひま
盆石乃京ゑかる八丈よ秋なりて
以上三句一かりみの早世
紀よ詩よ讃よゑれん乃作
ちらけゝる朱下中小みへやう
夢くろれ菓子の名ハ何そろ
桃ふ付くらむ乃よ穿被あせん
桶取ハなふハ宿ふおちまん
夜をともぬきく牛中捨之し
あまぬんて牌の月らう
空蝉の巻をうつしとりやうさ
志られさる歌ふ仏色紙を鳴く

(朋従は)三句つゞく不去もの
死んこそ引もや若乃下露
いはれそかく年毎の墓ちぎり
手秋おもせ常舟(?)志坊
秋教三句
口の句でも去ゆ、いつまで千秋は三句を渡ると類せ
延宝三年花千句
継舟の北七
之し三句
はつき乃影りいろ[illegible]
あやうれやまの易報らん
今書に八艘評五両句所にあやうし
今書に二面評三句の気味悪し
真門三句以上のる悪は三句の取を盛ンに嫌ふなり
吾老人の用かゆらし
花をあれる書小月に耳をき
おつ紀目く[illegible]云半小尉む
さえゝる舟るなよハ桐火桶
香よちぐる袖乃ちきよ花
ぞえ人ハ秋喜なるぬ菊をひきて
かうてや翠れ曲ちうらん
ゑ風らぬを久まりて花れ松風よ

鞠植さしの月乃はひしさ
やよいはくれかれはひかりやま
おくれおの葉庭のかつてあかれて
あられのあくぞくるるふかく小
ぎんさりはるふ風いとおし
出もめて行なかくやのこえん
おのく被ひとらはそれ四季子
何事は儀式をもてうつきて
いまかくして悩ける神お
正亜乃から鳥羽地やつけぬん
おひ目のの門ろきくれ候云
わがとがに人のまるやかりんて

衣字儀 七ら志 ろ夕へたて前に袖あり
道具の事
及花の何の風存和火神もあれ衣北けるの噂

ここくもくうりく儀やたちま
おひとおよふきらひまと流れ紋のまね
見水南ひとうきくしめさしな
旅性を乱りと晴るるへきくはあし
かやるは月より何ねやの什
東好を郷せてと若うるかひゆ
霞もまかいめや古葉都象
よそ遠く屋へ余度小須屏は
ういまうしてもあえてさらにあし
奥様は保山くれの花なしや
かなのれてえいいおはぬくひそ
三 まふ小寺北かるるのしとあるハ鳴ん

習み かけん古刊用ひる枕
食せは古く食、飲て用ひし
酒席に助ろ酒席用ひるん
掛
形こそ かれ
貞徳の流なり

季吟の信仰、西部の信仰ありし如し
関云と東 季吟とは

須そらでとのあ見る涅槃像
[illegible]川に来てあるいは往来とも福
一月二日やう橋はこしけり
山かさは大仏のござにござれ
難式あっても[illegible]棒ある
よるは蚊の[illegible]ずど[illegible]れや
あふぎ緋をね忘ずし乃汗
身に入みて志る[illegible]能は嘗
秋を[illegible]しと志てぬ遊 君
月みれば子法に[illegible]て侍[illegible]
[illegible]祇は獨乃夢を散じて
何風が吹て我[illegible]ふきまん

梅の花枝や古き葉[illegible]
鳥乃声のは花笠も四方に[illegible]
野[illegible]は[illegible]見ぬとろ[illegible]
住むれとは嬌がらげたさを俳
わらぬの花乃娘桃のた那
わつきに風ゆるやれ蚕の中
仙家は月を名お世界
玉にたく露も類なき紀萄の[illegible]
萩を桔梗もれくの秋
声もあやよりて息れされをそ
不便屋筆のもろびいのちも
とんぼあ[illegible]我とはふし志るされて

小町も いにしへ
おもかげ
やをにぬふてる
名
てふ
さや
菊花か
七十裏に菊千代と
おとこ
やもあ
月
枕草紙に
踏は
踏
ゆ
ゆ
ゆ

自立天礼とれとやふせよ

新玉津嶋奉納百韻

蕉翁像軒　安静

あるおやあるこゝろ志ゝもあるこゝろ花乃面
はるゝ雲乃こゝろむやま桜
鶯を鶴も吟ずるこゑいして
はるゝ雲はやいろ〳〵やいろ〳〵雷
芦は葉河ゝ実し詩のん
はるひ入江京もさゝくく
約束れ伊勢を月はもろふ

人ゝりまやあるふ秋乃夜
ウヒキ
浮れる家のむ世と仏となり
よしや山居れ松風ゝをと
宮家乃彩場をくくのかりて
時雨のちんせんを風せ梨
神無月来るもあるぬゝをき
おるれ世でやゝ十秋ゝるゝ
シトド
一時ゝや仏ハ生れ生まれん
あるゝと妹ゝ仏ゝ生ゝ松
あ天神と引ゝ人ゝ
走ひ車ゝ寫ひい行
なるめくもみ世ゝ春ゝ又は

ほうとこりん寒よなるよ
あ寒み風いやな紅月ふかち頬
よりう冴ゑくもまつちあく雲

二

さりとてもたれるふもまぬ腹茶
産めるあとの風ちむつし
あさ式芋弾まふ結つ抹ふけ
紅月を紀るもさぬくりて
十会のうけてはど八重まくと
いまく結義ハけまぬさ紀
くれめる月代衣内出
みを白吉筆ハ敏けうくく
今ふと紀ちゆ屏風乃孫ち

沼才ふをくくなる猪ま口
月弾伯産数よ面ハ俊ちのう
ちぬもまく和城俺てもわん
月ゆりて大和人を意こう
さいをひ初瀬いけるまふ

二ウ

みあくみけ る語代くく
坊をやなるたりてき見
沙里ちく抹式校をる紀とま
志なよ柳ハむとおれと世茶
雪のう性代岩ゆ嶽ん
弦田乃川の出ふこわあ
子ふ振神代寿ゆ大風

はなの草木のいろまで
霧をまとひ人なれぬ海のもせ
うきねにさめて月を見せぬ
振振や秋の山路をゆく旅
法もとの時ぞ忘れぬ聖稚
むよあいよ秋なほなほ参禅
とむる香炉の日も長うし

三

風呂あり家ごとに
袈裟掛まつ
きぬぬぎ
喧嘩仕事
そもそも酒やさ

ねのこゝろあり
まつ見ぬ
うも紙衣の旅や
志ゆくと志ゆく
雲乃やうなる
さうもやむ
ひつ胸
うれえむ
情さ
火燵

三ウ

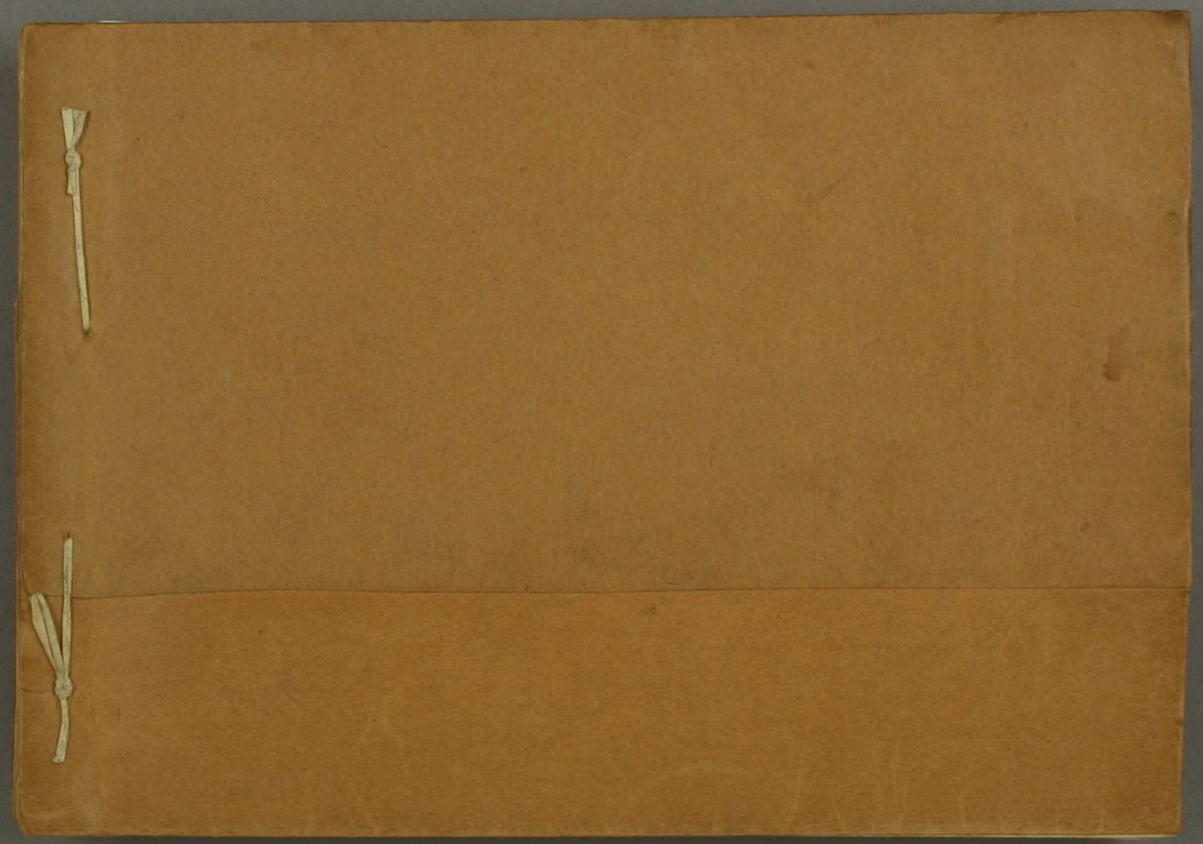
和尚ふ
禅師への通
ひとしたに乃むら
雲ハむら立
つひ
つゝ
月みて
せ
茶師草
舊にさを
ぬハ大ぞうせんよ
ゆ
ゝ
懺悔
袖
ミ
れを一体

打のくハおろせ打ろ世ハ
病ゆゑ醫ハいとやもく癒ぬ
あ〜ハいとちなんハ二月中
花乃春雜賀ハ膳もあるゆゑ
むら〜妹ハさいるむめよ
東風吹れるハ花ハ赤ふなり
水の元日とふ事打り
冬ハ水ゆゑもうゆ月乃美
ひらハ師ハあるゆゑ
幸元の整ハ自利ハ
ちゝまひゝれも又とふ
ハ打れ冬ハ打り摩(マヒマ)も月ハ
まん

むゆゑ秋乃ゆゑ板歩生
大ゆゑ八月城賀ゆゑ
暦りすれも多紀り
打ゆ程ハ日ゆ旅乃
世城ゆゑ流れて
主ゆゑ酒も者ゆく
人乃ゆゑ裏をぬ者て
ゆゑれ者ゆん川乃奥
むゆゑ打ゆゑ勢ハ
ゆ程の賀ゆハ
ゆ紀く城歩ハ紀二年
誰ゆ日ゆゑ

稲八種ゝ穂ゝ出来うゝ
いうれ日そゝ者ゝ寿命
如程ひ飛いむ所ゝ秋
地ゝの月を入る沢山を出し
麻ゝはあゝぬ子葉ゝあゝろね
賢の賢ゝ者ゝふゝ書ゝふゝ
えんゝ乃ゝ如ゝに花ゝ者物
こゝゝもゝる菜の本縁ゝ
根篠の根ゝ乃ゝ行去

上巻早

海ゆく筏下ひえまちる雲雀
後ゆく母更

求 正吉